

大阪府立中之島図書館蔵『毛詩品物図攷雕題』について

井上 了

はじめに

『毛詩品物図攷』とは、岡元鳳の本草書である。天明五年刊本として広く流布しており、掃葉山房石印本（宣統二年）や台湾影印本も存在する。二〇〇二年には山東面報出版社から王承略氏による簡体字点校本が発行され、容易に閲覧できるようになった（ただし点校本の底本は宣統石印本）。紙幅の関係上、該書の詳細については校点本の「整理本序」に譲りたい。

さて、中井桐園『天楽樓書籍遺蔵書目』（徳徳堂文庫蔵、天保五年抄本）五番ホに「先生頭書」として「毛詩品物 合巻 一冊」とあり、中井天生『水哉館遺編目録』には『履軒先生雕題 毛詩品物攷 一卷 未刊』が掲げられている。俗に『毛詩品物図攷雕題』と呼ばれるものだが、従来、その内容はもとより、原本の所在すら未詳とされていた。

筆者は大阪府が所蔵する履軒の著作について基礎的調査を行なった際、府立中之島図書館蔵の天明刊本『毛詩品物図攷』の棚外に大量の書入を確認した。該館の図書カードはこれを「中井碩果書入本」とするが、その筆跡は碩果のものに似ず、筆者の見るところでは履軒の手に酷似する。またこの書入には塗抹訂正の跡が幾重にも残されており、既に完成していた雕題を他者が転写したものとは思われない。さらに、この書入の内容は、履軒『左九羅帖』『画鑑』に示された説と部分的にせよ一致する。筆者は、こ

れが履軒自筆の『毛詩品物攷雕題』か、すくなくともその極めて忠実な抄本であろうと推断する者である。

いま当該資料を紹介し、翻字を試みる。菲才ゆえの謬は諒されたい。

凡例

底本は、大阪府立図書館蔵『毛詩品物図攷』（天明五年杏林軒五車堂刊本）。昭和十三年六月七日受入。請求番号「一八三・三〇六四」。資料番号「二九二二八」。旧蔵者を示す識語や印記などは認められない。版心の状態から合綴本と思われる。

底本に施された書入のみを摘録する。本文への朱線引や塗抹などは、悉く之を略した。

書入に対応する本文の箇所については、巻数と表題のみを示す。ただし、特に本文（対応箇所）を示す必要がある場合のみ、本文を「 」内に引用した。

いわゆる正字や俗字の類は、原則として当用漢字に改めた。また変体仮名等も現在一般に用いられている仮名表記に改めた。

虫損などにより判読不能な箇所は「□」とし、同定に至らなかった文字は「〃」とした。また適宜、句読点等やルビを補った。なお、片仮名のルビは原文にあるもの、平仮名のルビは井上が補ったものである。

參差行菜 アサ、

或曰、古之行菜、今之尊菜矣、本草諸書並不当据、今之行不中食菜、字無所当、采之亦不可筵、昔人云、「江東人食行、」蓋謂尊也、非後世之行。

凡行尊根著于水底者、其莖甚長、隨水之淺口、此因無長莖、且沒銀股形、又不見葉浮水面之勢口失之。

根生長莖而花葉著于莖也、水底之根不得徑生花葉矣、若此因、与蘋無异。

于以采蘋 カハラハ、コ

按、以繁衍易生得名、是也、然其得名在漢地也、今以蜻蛉州難生、疑佐渡産者、則誤矣、夫風氣各國夔別、豈可一概以名求之哉、是因恐舛、当以佐渡産者為真。

此因是常之ハ、コ矣、未親カハラ之状、

名物解云、「佐渡産者、莖葉似艾、葉向背皆白、蟠然。」

于以采蘋 ドウガメノカ、ミ

朱伝据陸疏混大小而言、其爽非誤認也、仍是大辨之意矣、但欠詳耳。

陸疏云、「蘋、今水上浮萍是也、其腫大者謂之蘋、小者曰萍。」

蘋浮于水面、葉与水平、此因失其象。

于以采藻 モ

按蓑衣十二章、藻居其一、古制雖不可考、而今錦文染色多作藻文、皆長莖宛轉旁生葉、蓋十二章之遺也、今川水中往々見此物、即古所謂藻也、世俗

未知何稱謂非如蓬蒿細絲魚鱈者、又非馬藻、但宜以形狀求焉已。

海藻和名ナノリン^ノ形状略与宛轉旁生葉者相類、似可相徵。

彼茁者藎 ヨシ アシ

俗説、藎蘆葦為一物、邦名与之、蓋以其大為良材也。

莢蘆葦葦為一物、邦名安之、蓋以其小為不材也、唯葦中実別為一種、別有陸生者、較堅實、邦名遠伎、未得漢名、俗以葦充之、非也。

ヨシアシノ名ハ右ノ如クニテ、サテ専ニアシヲ大名ト云ヘシ、和歌ニヨシアシヲ連テ詠スレトモ、トリハナチテハアシト詠ナリ、ヨシトバカリハ詠コトナシ、然ヨシハ元草名ニアラス、縁語ナリ。

藎有苦菜 ヒサゴ

甘可食如瓜者為瓠、不可食唯可包裹取藏物者為藎、制字自有意。藎未嘗有不苦者也、不苦即非藎。

采葑采菲 葑スカンバウ 菲未詳

有俗名「唐菜」者、又唐菜ノ中ニ有高菜有賤菜、是即葑菲云。

唐菜ハ菘トモ云、然ハ古名葑菲、今名菘ナルニヤ。

加茂之淹菜有名、蓋菘云。

誰謂荼苦 ノチサ

此因説皆謬、朱伝「荼苦菜」非以「苦菜」為草名也、是論荼之味耳、正与

「薺甘菜」作对也、猶謂樽為惡木、蓬蒿為惡菜也、朱伝又云「薺風」与良
相「茶薺」之茶同、在是詩、不可易者。

〔經有三茶〕 惟有二茶而已。

是園全是薺矣、薺之無刺者可食、豈苦菜耶、果然宜臥以ヒメアザミ也、又
月令称「苦菜秀」、若薺花不得称秀、是皆可疑。

其甘如薺 ナツナ

朱伝「甘菜」、非以為草名也、脱詳于前、此謬耳。

自牧掃蕪

〔伝蕪茅之始生也〕 伝「茅」下疑脱「秀」字。

所謂「茅針」、是茅秀之初生者、非茅也。

爰采唐矣 ネナシカツラ

〔爾雅唐蒙女蘿云々〕 当直以爾雅為誤、不必回護。

綠竹猗猗 タケ

本或作「葦」、故有王芻解耳、今註疏本亦然、未嘗以葦為王芻也、今集伝本
作「綠」、蓋古來有兩本也。

藟莢揭揭 フキヨシ

前見。

芄蘭之支 ガ、イモ

芄蘭、ユフカホ。

邦名「夕顔」、華葉略如牽牛、花白而紫、細而四出、結実円長如丁香、故
俗名「丁子茄」、其一頭円、一頭銳、円頭帶萎花之莖久不凋、正類平臚之形、
又三五累、者類平臚、蓋詩所謂「芄蘭」是也、若「蘿藦」、朱子不視臚之
状、蓋失之。

今人往々謂匏瓠諸花為夕顔、亦謬、此謬亦旧矣、如国詩「夕顔棚下納涼」、
蓋指匏瓠也、失古義。

一葦杭之 見藟

一葦、謂小舟、非物産。

焉得設章 ワスレクサ

集伝誤以合飲為草名以解也、不必回護。

藟花美、親之可以忘憂、故名焉、非食之、本草諸説、亦皆謬。

彼黍離離彼稷之穗 黍モチキヒ 穂ウルキヒ

大倉州志云、朱伝「似蘆高丈余」、是蘆粟トウモロコシ、非黍。

或曰「粟也」、是謬説。

曲礼有「飯黍」語、黍亦非不以為飯。

中谷有種 メハジキ

「離」、疑当作「種」、字似佳、与「菑菑」之「菑」異。

爾雅、「菑、菑」也。

彼采蕭兮 カハラマツハ

集伝從陸疏也、其旨「蕭荻也」、蓋有脫誤耳、「牛尾蒿」亦見于陸疏。所圖是蒿類、非蕭也。

彼采艾兮 ヨモギ

艾獨不明其莖葉、何也。

丘中有麻 アサ

麻之為穀、是今之胡麻、非可統之麻、子雖可食、不可以為飯粥。

方秉蘭兮 フチバカマ

湖之王子濱有沢草綠樹而生高四五尺、每枝五葉、夏發白花、狀似今之蘭、花白而小、或曰、「此乃古之蘭矣」、是說似得當、旧解蓋失之。

是草和名無邊、為貢獻之品、鄉人呼為「郁子」者蓋無稽。

据溱洧之詩、是芍藥開花之時、春末夏初、乃古之蘭今之蘭皆未有花也、遊人若采、無花之草、其何為。

不能蓺稻粱 稲イネ 粱アハ

古曰「粱」、今曰「粟」、不得相解也、朱伝膠。

俚言訛膠、粟奪粱名、非「粱隱」。

粱黃穀、故稱「黃粱」、亦有白粱、故以分焉、又曰、黃粱俗間蓋以「黃粟」為定名、而後遂去「黃」、單呼「粟」也、名稱之轉移、多此類已。

蔽蔓于野 ヤブカラシ

今和ノ「サンキラヒ」ト云モノ、厥ニ似タリ。

采苦采苦 見茶

采苓之「苦」、与谷風茶苦之「茶」不同、宜別出圖也。宜移前茶苦圖入于此。

葳蕤饒茗 蕪ヒメヨシ

「蕪」：「蕪」古蓋同音矣、可以為蕪之艸、故曰「蕪」也、「」之有無、不足論已、猶「耶」之与「筴」也、用草為「蕪」為「蕪」、用竹為「筴」為「蕪」。

可以漚菅 カヤ

〔カヤ〕スゲ

菅一物而有陸生有水生、陸生者一名「莖」、此亦有「山菅」之名。

或云、「菅」ハ名、「スゲ」地名、「菅原」非水沢也、古以菅為蓆、今以為笠為簍者、無水陸之別。又按、「スゲ」是大名、陸生者為主、而水生者亦同稱焉、彼有「菅莖」之名、而此不異名、不必古今之異也、莖稱「山菅」可也、唯東門之詩、則無水陸之別、是古人亦混用耳。

「秋花」モ茅ナリ、是ハ花白カラズ、一種中ノ別ナリ、別ニ菅名ヲハハモ同類ナレドモ別ニ名アリ混スハ茅ヨリ低小ナル物也、詩云「函爾于茅」、冬ニナリテ茅ヲ刈ニ夏花ノ者ヲ扱ヘキヤウナシ、此ニテ皆茅ナルヲ知ヘシ。

浸彼苞稂

陸說非。

浸彼苞著 ハコロモ

或云、ハギ漢名未明、或以為胡枝花、或以為天竺花、未詳当否、蓋此即古之著草矣、形狀略与図經合、惟「花形如菊」一句為未合而已、姑錄備考。

四月秀莢 ヒメハギ

通雅云、莢、狗尾草也。是莠族。

〔謝安乃云……〕是郝隆嘲謝安之語、非謝安之言。

六月食鬱及藟 ノブダウ 鬱見木部

〔ノブダウ〕イヌエビ

七月烹葵及菘 葵カンアフヒ 菘マメ

図說皆謬。

古之葵、是今之蔬矣。

葵与款冬、二物相類、本草諸書以葵混乎款冬、而葵失其名、乃更指他物為葵、如錦葵蜀葵是也、雖帶葵名、而非真物、庖厨本草詳弁之、允当。

和名抄引、「崔禹錫食經云、藟、和名布ノ木、葉似葵而円広、其莖可煮噉。」所謂葵、蓋指蜀葵耳。

通雅謂、葵為款冬、雖未詳密、而其差不差。

「菘」雖總名、而單舉之、必是大豆、以大豆為之主、而用尤広也。

七月食瓜 ウリ

瓜、ナウリ。

可漬可烹、又可生食、似甜瓜而大、俗名「菜瓜」、「菜」謂鮭也、蓋可用為食鮭之瓜、云芳甜瓜、唯可生食矣、不可烹漬、焉得當常食。

糜。糜似瓜而小、同類而別種、非近本之謂。

毛詩品物圖攷卷二 雕題

草野之萃 ウキクサ

既云野之萃、必非水物、宜以毛伝為謬。

朱伝亦從爾雅耳、所謂「藟蕭」、蓋蕭蒿之屬耳、不必深求、若不得其詳者、勿図可也。

食野之萃 ヒシワ

図不見鉞股蔓生之状、何也。豈邦名未当耶。

甘瓠果之

瓠甘而匏苦、既在前条、呂説未密。

南山有臺 スゲ

有水生、有陸生、皆是菅矣、陸生者一名臺。

若生水者、不得「南山有臺」之語。

北山有菜 アカザ

葉、シバ。

俗用「芝」字者是也。若藜園圃或湿地沢辺生者、北山恐無之。

薄旨菜芭 アサギキク

弁解云「チサ」、此宜耐其是非。

下莞上簟 ツクモ

莞園者、今園有偏勢者、可憾。

薦与女蘿 サガリコケ

薦、寄生也、但寄生有二類、若桑寄生是木本。其木本、称寄生木可也、其草本、固称寄生草也。後世詩賦所称、並草本耳、無木本。

薦在木部故也、「女蘿松蘿也」、不須曉。

薦、古賦「古計」、与「苔」同疏、蓋以其根不着于地、故為一類已。即寄生之意。

李德裕邪正口弁有言、「松栢之為木、孤生勁特無所因倚、蘿薦則不然、弱不能立、必附他木」、以見薦蘿之為一類甚明。

又楊收伝曰、「蘿薦附灌木」、亦可徵。

蘿薦寄生矣、薦元非寄生、其根在土、然延蔓之後、蔓自生根着樹上、放木根、雖有断絶而不死、若寄生草、称準寄生可也、施字根在土在樹皆可用。

木部薦園解宜併于此、故先辨焉。

終朝采綠 カリヤス 見前

王芻、恐非可食之菜。

綠菘通。

白華菅兮 見前

白華菅、謂菅有白華也、菅草名、不問溷否、朱伝亦襲注疏之謬、舍之可也。

露彼菅茅、茅菅。

薑茶如飴 ツボスミレ

薑、「スミレ」ト訓ハ膠也、別物ナリ。

ツボスミレノ花ハ藍色ナリ、紫ト云カタシ。

「茶苦菜」、当作「茶」。蓼風所謂苦菜、亦非謂草名也、称其辛辣之物也。

藟之在菽 エンドウ

菽与菽是二物、伝以為一物、蓋誤。郭璞・李巡釈菽為胡豆、即豌豆矣。

菽風有菽、乃合称在菽亦可然、是詩与麻麥瓜糜等相連、似非一物。

維糜維芑 梁在前

時珍曰、「赤黍曰穠、白黍曰芑」、似長。

集伝同「粟」字、当削。

維筍及蒲 タケノコ

蒲根可食者、宜圖于此。

貽我來牟 來ムギ 牟コムギ

「麥」字從「來」、是「來」者「麥」之本字、音莫覆反、不当作別音、「來牟」即是「麥麩」矣、孟子所謂「麩麥」正与此同。

「麥」者大名也、但与「麩」作對、則為小麥耳、語意與「麩」、「鹿」相類。

以醇茶麩

爾雅「茶」作「蔞」、註引是詩亦作「蔞」。

薄采其苢 ジュンサイ

今苢菜、色不赤。

或云、今世人所食苢菜葉無缺、蓋無缺為苢、有缺為苢、大同而小異。

毛詩品物圖攷卷三 離題

標有梅 ムメ

梅以為遷寒、尚矣。此以其大名解可也、何必分別小名、且如杭樹、似梅者、焉得用猗毛詩之梅哉。

林有檉楸 クヌキ

楸木名、檉猶澁也、非木名、木之檉、猶草之澁、文書可徵。

唐楝之花 ザイフリ

唐楝解詩甚易、凡有花之木、皆無所妨、唯論語唐楝言「偏其反、」必如梨花海棠花者而後可、恐是与常楝一類、古來解者皆誤。

通雅以為常唐音近、是一物。

凡彼栢舟 ヒノキ

栢、カシハ、マキ、俗名ヒノキ。

扁栢、ヒノキ。

側栢、仏手栢、コノテカシハ。

吹彼棘心 コナツメ

「難長養者」、詩解之泥者、不可從。

此是荆棘之棘而澁生者、又棘之短小者曰棘。所謂圖棘食寒者、与荆棘自別。棘棘是二物。

山有榛 ハシバミ

今山徑荒野及沙岸、与荆棘雜生結子如栗者、即古之榛也。和名サ、グリ、俗名シバグリ、有刺喜遷逕路、所謂「榛蕪」是也、陸疏云、「荳栗澁生、大如杵子、中仁皮子、形色与栗無異也、但差小耳、」豈古之榛、与諸家所說樹較高大、子形如橡、不得言似栗、而小且不睹榛蕪之義。

此邦所謂「ハシバミ」者、与諸家說合、而味短不中食、恐不足充遷寒饑費、必非古之榛、諸書所載「芋栗」、「栢栗」、蓋亦榛類云。

榛中亦应有大小數種、「樹之榛栗」、是其差大而美善者与徑路榛蕪者、蓋有不同。

樹之榛栗 クリ

見栗有大小、座又有異而可知矣。

椅桐梓漆 椅イ、キリ

陸疏云、「梓矣桐皮曰椅、今人云椅桐也。」鄭大際說同此。

梧几也、元非木名、宜梧之木、故配桐為名也、古不單呼梧矣。

桐キリ

不得更以「梧」配桐。

漆ウルシ

漆於琴瑟、亦不可欠者、其首尾之銘、豈有須梓者耶、不可言無用於琴瑟。

椅楫松舟 椅イブキ 松マツ

弁解、椅ビヤクシン、非也。ホコカシハナルベシ。

不流東瀟 カハヤナギ

草亦無不可。

無折我樹杞 コフヤナギ

詩之三杞、疑竟是謬說、即合為一物、於詩意無所妨、唯孟子「杞柳」有取於木性不可移、然以帶柳為名、則是柳之一種、與單呼「杞」者不同、宜別論焉。

三杞即合為一、何為不宜、蓋時於杞取義、唯食料之枸櫞而已矣、其他亦皆無妨礙、則當悉以枸櫞解。

或云、「古人以其山生野生及食料等分別之耳、不當生疑」、是長者之言、而實舛理、今一二弁之、山采杞、旧以為枸櫞而南山有杞、則以為狗骨、夫北

山既已有枸櫞、南山無折我樹杞、是鄉村所樹、若食料之枸櫞、尤為相宜、何故更作杞柳之解、湛、露在杞棘、必以為狗骨、則枸櫞獨不蒙而露者耶、餘可推而知焉。

顏如舜華 ムクゲ

舜華樞同、文字集略曰、舜地蓮花、朝生夕落者。和名木波知須、據此地蓮、即木芙蓉矣、可備一說。

隱有柎 ネズミモチ

柎、カシ。

柎可以為三木者、故械亦謂之柎、邦名加志、械亦訓加志、或加世、一也、器名転為木名也。

集于苞栩 ハハツ

〔ハハツ〕イチ。

櫟ノ実ナキモノヲ栩トス、櫟同。

万葉ニ「イチノ木」ト詠ス、是ナルベシ、ソノ実ヲ「イチヒ」ト云。

隱有楊 タチヤナギ

「タチ」ノ姓ハツケヌガヨシ。

有條有梅

条柚之条、梅杏之梅、足矣、何必穿鑿焉、凡古人取近于目者起興、而後人必搜窮僻以作解、宜乎其不合。

隱有六駁 ムク

〔駁駁音同〕「駁」・「駁」同字。

山有苞楛

「楛」、大名也、何必論常楮。

隱有樹榿 アリノミ

有無表名、是反語、恐是一物。

蟻喜食梨、故呼梨子為「蟻實」、「蟻」說為「有」、有之反為無、故亦呼為「無實」也、並是梨子矣、不宜別呼榿為「有實」、且「有實」・「無實」皆果名、非木名也、縱令如圖說、梨木既呼為「無」、則榿木當呼為「有」矣、不得併實字為木名、不然、宜稱「アリノミノキ」、亦太冗長。

六月食鬱及藟 ニハムメ

毛伝似長。

常楛之華 ニハサクラ

今世俗所謂海棠、即是楛矣。

何玄子曰、「如垂絲海棠一般」。

凡明諸儒、多言常楛花兩三相麗、此圖殊不相肖、疑是和名未当者。
ニハウメ、以果實為稱也、恐非同類。

楊柳依依

「楊柳依依」、与「襟襟濟濟」、語意相類。

「楊柳」、謂楊与楊也、「蒲柳」解頤。

南山有杞 ヒイラギ

南山亦枸杞耳。

蕨与女蘿 ヤドリギ

「蕨」字從「艸」、必是草本、宜収于草部、本邦旧說為「都多」、即是蘿蕨之屬、雖未知所本、恐實得本義也、詩与女蘿同處于松上、必是係蔓矣、若夫葉寄生、是木本安得施哉。

今按、蕨蘿屬秋後葉紅者、漢画中往、觀施于松上者是也。

按、陶弘景云、「蕨是桑上寄生、如蘿松上寄生」、鄭樵曰、「寄生有二種、大曰蕨、小曰女蘿」、是諸說未得當、然据此等語可知草本係蔓、亦通稱「寄生」焉、已以其根著于樹上也、然則古人稱「蕨」為寄生、非訛謬也、但後人硬執木本說、遂致大差耳。

維柞之枝 イヌツケ

詩詠柞者五、並同栩櫟耳、是篇唯以采菽、車葵為「鑿子木」、不可曉於詩義、亦無所据。

柞櫟拔矣

櫟柞同、クヌギ。

其檀其楸 ギヨリウ

爾雅釈「檀」作「河柳」、元是謬說、不可從。

櫻、今有大木、枝似柳、而葉似茵陳者、是也。古人多言「如松」・「似栢」、殊不相類、又其生不必河邊。

盤寿杖、以扶老製者、則口竹也、非楮。

其類其栢 ヤマクハ

今諸州往、出野蚕繭布、其所食恐是櫻或栢、但未有所考。

梧桐生矣 アヲキリ

〔アヲキリ〕アヲニヨロリ

此宜合于椅桐条、在前。

毛特品物圖攷卷四 雜題

関関雉鳩 ミサゴ

〔有定偶——有別、〕竟是膠解、說詩者之臆度耳。

狀類于鷹鷂、故有「魚鷹」之名、又是山禽、非水鳥、集伝未得其真、所謂

「百聞不如一見」者也。

陸疏云、「雉鳩大小如鷓深目、目上骨露出。」

嘴毛鷹ノ如ク鉤曲ス、面目並ニ象ヲ失。

黄鳥于飛 カウライウグヒス

或云、此圖是面眉鳥、非黄鸝也。

格物論云、「鶯大勝鸝鶴黑眉、嘴尖紅、脚背、遍身黄色、羽及尾有黑毛相間、

三四月間鳴声音円滑。」形状与本圖不合、鶯豈亦有數種、与据金衣黄袍ハ語、

格物論似長。

維鳩居之 ハト

〔此鳩不指一種、〕是也、但鳩多種類、大抵亦当分二色、曰野鳩、曰家鳩、家鳩爲鶯巢而棲之、則無事鶯巢矣、居鶯巢者、必是野鳩矣、在野鳩、則不当更論其種。

或曰、鳩無家野之分、其色蒼灰、其声囁々者俗名塔鳩、是爲本色、巢于人家者、居于鶯巢者、唯是爲多、其他數種皆其文別不当舉論、譬之、家猫毛色肖虎者爲本色、而黑白赤斑、亦皆無非猫、人亦不爲其黑白而別製名也、犬亦然、故鳩唯一種、毛色分本末可也。

或云、鶯字元取合音而製焉、非別有一。

雁鳴雁 カリ

〔畏寒、〕未得物理。

流離之子 フクロウ

〔流離之爲鳥不可改也〕亦可改也。

莫黑飛鳥 カラス

〔皆不祥之物〕「皆」字元帶狐而言也、此摘出一物、宜省「皆」字。

烏鴉元同物、若慈鳥小形者別是烏鴉中之一種、勿以此乱大名、可也。

是圖、蓋欲画慈鳥小形者也、故失於形象、与說不合。

于嗟鳩兮無食桑葢 コバト

此鳩宜合于前鳩条、是鳩之懸声者、俗云タウバト、豈是与則灰色者也、如鶯鳩、蓋因鷹化爲鳩語而製名者、舍之可也。

鳴鳩之鳴、与鳴倉庚之鳴、同非鳥名。

タウバト又称ドバト、豈是ハ与、而鳩亦他種類。

〔集伝似山雀而小〕或云、「山雀」当作「山鶴」。

七鬼与雁 カモ

鬼亦多類、大抵当分大小二色、其大鬼、青首而已矣、其他諸種皆小鬼矣。

是詩所指無大小之弁、但云「主大鬼」則可矣、以大鬼、味尤美也。

〔其躡企、〕謂歩時躡不着地也、飛時伸其脚者、特鶴鷺之類長脚者耳、如鬼雁短脚、皆屈脚在腹下。

〔如鴟青色〕所謂「青色」、特其頸頭而已、故有「青首」之称。

鷹鷂鷗羽 ノガン トウガン

〔無後趾〕、宜言「無後指」也、是四指皆前指也、圖少一指。

有鴟萃止 見流離條

フクロフ。

諸家紛紜難弁、今定分三物、

鴟、鳥同、フクロフ、

鴟、ヨタカ、

鴟、ミ、ツク、頭目如貓毛角兩耳ハミ、ツク也。

歛彼展風 サシバ

展風、非鳥名、旧解皆謬。

鴟鳩在桑 ツ、ドリ

鴟鳩是鳩中之一種、亦宜合于前鳩條。

〔稻鞠〕、「鴟鷂」未詳文義、然恐是戴菊之義矣、戴勝与鴟鳩不同、頭毛如菊花者是也。

按月令季春「鳴鳩弘其羽、戴勝降于桑」、蓋即鴟鳩分明、与戴勝二物而並為侯鳥、註家積辭混雜、遂成後人之謬耳。

布穀、ツ、ドリ。

布穀、一名郭公、以為社鴟之異名者誤、今俗称カツコウトリ、豈是与其音云。

鴟鷂鷗鴟 ミ、ツク ヨタカ

鴟鷂也、見于前條、是与鴟二物矣、鴟亦与鴟鷂不同、三物同類而相当相混。

鴟鳴于埴 コウツル

〔コウツル〕ク、ビ。

〔コウツル〕是俗稱之糺謬、非和名也、昔人不識鴟、以「鴟」字充、此故稱其字音如名、今不当循用。

有鳴倉黃

宜合于前黃鳥條。

翻翻者雛 トシヨリコヒ

〔雛〕元訛文、当作「雛」、即「隼」之煩文。

按、今本說文、「雛、祝鳩也、从鳥隹声、思允切」、二雛、或从隹一、作「隹」、若單从「隹」、必不得「思允切」也、唐本說文則从隹、作「隹」也。說文一

訛、諸儒不之察、遂用入伝註、永為律令、可歎矣。

脊令在原 セキレイ

〔セキレイ〕ニハコナブリ、ニハタ、キ。

詩緝云、脊令非水鳥。朱伝襲註疏之謬。

鶴鳴九皋 ツル

〔灰蒼色〕、恐混鶴鷄也。

別有玄鶴。

如鸞斯飛 シマキジ

此圖恐未愜、宜白其頭腹。

宛彼鳴鳩

此鳴鳩、亦宜合于前鳩条。

「鳴」其事也、与「有鳴倉庚」之「鳴」同、非鳥名、且此鳩何必問其種別。

交交桑扈 マメマハシ

マメマハシ得紋粒、則背巾輻輳之、然後能破之、故得是名耳、焉得不食粟。

其嘴黃腫色、故有「窃脂」之名、伝「背背」恐謬、或是蠟背之訛。

弁彼鷩斯 ゼンシヤウカラス

此圖不見腹下白、何也。

匪鶴匪鷩 鶉ワシ

鶉、説文作「鷩」、「从鳥敦声」、与鶉鷩之鶉不同。

一説、「鶉」是「鶉」之訛、説文即「鶉」之省。

鶉トビ

宜面翱翔自得処。

鶯鶯于飛

爾雅翼云、「頭戴白長毛、垂之至尾」。此圖無頭毛、何也。

是圖雌雄無別、恐失当、凡鳥雄美者、雌必不美、鶉鷩鷩雉孔雀皆然。

鳧鷖在涇 カモメ

コノ図、頭ノアタリ千鳥ニ似タリ、鷓ニ似ズ、改ベシ。

鳳凰于飛

鳳為鳥中之皇王、故称「鳳皇」耳、後字加「凡」、無別義、非雌雄之説。

鳳之形状無可徵、今所存皆識緯家之言、無足采。

按、隸統古碑繡鳳、全如孔雀。

振鷺于飛 サギ

此圖殊不得白鷺狀、但肖五位^ニ而已、何也。

肇允彼桃虫 サソイ

桃虫、非鳥也、旧解皆謬。

易林是比喻、猶俗言「爲生鷹」之類、不当用解物理。

毛詩品物圖攷卷五 離題

野有死麕 ノロ

〔ノロ〕クジカ

ノロ是韓名、非和名。

今諸州有獐、有小角、未知与此圖同異。

集伝、「獐、一歳豕、二歳豕、三歳豕、」未詳孰是。

無使楹也吠 ムクイヌ

伝宜言「楹綿犬也。」

豨豨五祀 豨豨五穢 フタ

野猪曰「イ」、家猪曰「フタ」、但古並用「豕」字也、故「イ」通于家猪、而「フタ」則不通于野猪。

于嗟乎騶虞

其騶尚矣。

象之箝也

キサ。

並驅從兩狼兮 オホカミ

雖有白狼、而茶褐其正色矣、制圖宜從正色。

狼後低、此圖失之。

一之日于貉 ムジナ

謂取狐貉、而單曰貉也。

取彼狐狸 タヌキ

唯狸後足有跟、跟蓋所謂蹠也、貓貉皆無跟。

呦呦鹿鳴 シカ

鹿宜在前麕之次。

象弭魚服 トノ

魚謂鮫魚也、旧説不可從。

維熊維羆 クマ

今齋慎有獸如熊而大、能人立而趨、猛於熊、蓋即羆矣。

羆是有跟如猴。

匪兕匪虎

凡鳥獸踏圖、嬰以火焰者、其本起於龍、而凡不可的知者、以此神之也。兕非不可知之類、又非神奇、當削去火焰。

有猫有虎

礼記称「其食田鼠、」則猫小於虎、可知矣。

赤豹黃熊

豹似虎、且坊間有全皮、毛色形状可知矣、何不可圖之有。

毛詩品物圖攷卷六 離題

蠶斯羽說詵分 キリトス ウリクヒムシ

〔キリトス〕是今俗之訛稱、不得以作訓。

陸璣曰、「蠶、蚣蟬也、楊雄云、春黍也、幽州人謂之春箕、〃即春黍蝗類也、長而背、長角長股、背色黑斑、其股似飛瑣文、五月中以兩股相撻作声、聞數十步。」

鄭夾際云、蠶蟲即一種大背蚱蜢股長而鳴甚響。今按、鄭夾際之說非、蠶蟲宜以論阜蟲。

此圖與陸鄭合。

通雅云、「凡似蝗不為災歲時恒有者、通得蠶名」。又春秋以蠶為災虫、即蝗也、非詩所關蟲。

邢昺又云斯語辭當以爾雅作「蠶」字作謬。

此解宜添一句、曰「非古詞所詠吉里吉里斯矣。」

趨趨阜蟲 ハタ〜

阜大也、是大蠶之義矣、解者動以生阜陵為言、皆非。

頰如蟪蛄 スクモムシ

〔生腐木中〕今生木亦自生虫、不特腐木。

蟪蛄據諸解並說蠶虫耳、果然耶、今按、後世多論蟪蛄是生糞土中、或生果

夷、其形状与蠶虫不相遠、時之蟪蛄恐或是蟪蛄、未可以蠶虫作定說、但其

生糞土中者似別一種、非蟪蛄、宜以果夷中為蟪蛄耳。或云、蟪与蟪一類二物、糞土曰蟪、果夷曰蟪、或蟪苗也、印大蟪、故蟪之大者為蟪、蟪同阜蟲。

スクモ之語、未得其義。如官巢蛛、而此与蛛非倫、恐是邦說訛謬移者。

蒼蠅之聲 ハ〜

詩原是「蠅」字矣、後譌作「蠅」。

蠅、ハイ也。蓋灰義、云「ハ〜」者、蛇也。中古誤為「蠅」。

蟋蟀在堂 古名キリトス

〔古名キリトス〕イト。

豊国有虫、首如蟪蛄黑色、翼如金鈴子、善鳴好闘、自野入牀下、正如爾詩之候、鄉名「キナツヅ」、其鳴闘者皆雌云、蓋此真蟋蟀矣。

大和州亦有此種、俗名「ヤマコロギ」、即古詞所詠「キリトス」之真物云。

今俗所謂「キリトス」、即是促織矣、然青色無黑、上所圖蠶与促織合。

蟬之羽 アサカホ

所在有虫状如白露虫、匪必水上、邑居庭中皆有之、蓋蟬蟬云豈原水虫所化、故水上特多邪。

因白露虫、宜脚着水上、不然不応「群浮」文。

五月鳴蟬 如蟬如蟬 セミ

蟬、クマセミ。

蟻、ヒクラシ。

六月莎鷄振羽 クダマキ

「故名梭鷄」、義不通。

蝟蝟者蝟 クハノムシ

〔クハノムシ〕イモムシ。

蝟不必桑、諸木皆有之、諸草亦有之、是時下有「桑野」句、故解作桑虫耳、乃註家之拘泥。

是図大不愜。

蝟卷葉為巢而居其中、以喻軍士之独寝也。

此宜図圈葉為巢者。

蝟尾有刺、故人畏憎之耳、図説並没尾刺、何也。

伊威在室 フメムシ セキダムシ

ワラジムシ。

ネコムシ。

フヤジムシ。

「ワラジ」之名、尤得形象、遠勝セキダ、且似古名。

蟪蛄在戸 アシタカクモ

サ、ガニ。

ジヨウロクモ。

燿燿宵行 ホタル

ツチホタル。

張華之外傳多、然魏晉人之詩、豈足以為証哉。

維虺維蛇

蝮長廬尺余、未太如割断者、此図未愜。

伝「七八尺」、蓋訛文耳。

胡為虺蝮 トカケ

蝮蝮、トカケ。

蝮蝮、イモリ。

守宮、ヤモリ。

蝮蝮、即守宮。

蝮蝮有子蝮蝮負之 ジガハチ

ナムシ。

クワムシ。

蝮蝮亦宜為製図。

蝮蝮不必桑、諸樹諸草蔬皆有之。

為鬼為蝮

疫病中有痧、蓋瘧疾之類云、古人不之察、以為蝮毒也。蝮之受冤久矣哉。

去其螟蝻及其蠹賊

螟クキムシ 蝻ハムシ

蠹ネムシ 賊フシムシ

四凶恐皆未懼。

蠹賊是一虫、正是合三虫矣。

食根者、蓋蟻蝻之小者、所謂蠹也、食桑葉者、即螟蛉屬、亦名螟也。

此邦別有ウンカ、細小而黒、与集豆苗菊苗之虫相肖、是大為害也、虫既長大、生翅而飛去、豈所謂蝻邪。

毛詩品物圖攷卷七 雕題

魴魚頰尾 ヲシキウヲ

此凶鱗大、恐失之。

鱧鮪發発 フカ

此凶鼻似太短。

「似龍」、蓋謬。

大魚之說在詩為謬。

江海皆有之、亦有大小、小者一二尺、別種而一類、凡詩所詠、特其小者耳、衛風取其可罟、周頌稱其入于潛、大雅美其可食、非小者而何。

其魚魴鮪

毛亦謬耳、不当為回鑿。

河魚有一物、鄉名志久智鮪、肖鱸而頭頂更扁、味劣於鱸、而形大、其子小弱者塩漬而食、其色如銀、腹中之卵味絶美、此成鱧耳、所謂「大魚」魚

子」頗有緣由。

其魚魴鮪 タナゴ

鱧、未詳。

魚麗于罾鱧鯨 鱧シヤジ 鯨ハゼ

〔陸氏以為狹小非也〕小謂其全形、非謬也。

魚麗于罾魴鱧

コノ凶鱧ナルコト不分明、本草ノ形長体凶トモアハズ。何ニヨリテ此ヲ鱧トハ名付シヤ。

魚麗于罾鱧鯨 ナマツ

頭較小、無鰓形、喙較尖、口較収、凡鱧所以異於常魚者、此凶皆失之。

鼉鼓蓬蓬 カアイマン

文從「鼉」、「鼉」是龜類之大名、鼉非龜類而何、古說皆謬。

長崎聞見録三載「ラガル」、形狀此ト同シ、曰、「ラガル、夜ニ海中ニ居ル、長ニ丈許、猛惡、諸魚ヲ食ヒ、人獸ヲ害ス、ニ大涎沫大毒アリ。」

コノ凶ト大小ノ異アリト雖、同物ニ似タリ、是龍類ナリ、必鼉ニハ非。

南海有鱧鯨、同長尾利齒害人、有以尾取物、如象用鼻之說、略与此凶合。

「ワニ」ノ訓ハ当否イカン。

イツレニモコノ凶ハ此ニ入ベキモノニ非。

龍旗陽賜

龍唯宜俊在河海者、不当凶靈中者。

鱈鱈鱈 ヤナギハエ

鱈ヲ年魚也ト説イカン。

おわりに

今回紹介した資料は、儒教の經典である『毛詩』に関わる注釈書である。しかし現在ではその内容から、むしろ博物学や国語学の専門家によって研究されるべき資料であると言えよう。このような性質の資料については、資料を発見・紹介し得る者と、紹介・翻字された資料を利用し研究を推進し得る者との協力が必要とされるのである。

このようにいわば学際的協力の体制は、懷徳堂や適塾などを研究する際には不可欠とさえ言える。国文学者や漢学者のみによっては懷徳堂の医学を理解することはできず、また医学者や薬学者のみによって懷徳堂の医学を疏解することはできない。懷徳堂文庫にはたとえば、二百年前の水銀温度計や顕微鏡に関する報告が残されているが、古典文で書かれたこのような資料を現代の科学史研究者は正確に読み解けるだろうか。また、そこに記されている内容の科学史的意義を古文や漢文の専門家は充分に理解できるだろうか。懷徳堂という「学問領域」を総合的に理解するためには、文系・理系の枠を越えた研究機能・研究体制が不可欠であり、このような研究機能を提供し得る機関として大阪大学は重要な鍵を五十年間以上も握り続けてきたのである。

懷徳堂は、日本の歴史上きわめて特異な存在である。その営為を伝える懷徳堂文庫は、本学の持つ、非常に大きな知的資産である。本研究科はこれを最も活用できる位置にあるのだが、しかし研究科内における懷徳堂への評価は充分なものではない。

残念ながら、「解体新書以前のわが国の解剖学として、たしかに最も高い水準」(小川鼎蔵氏)の報告が本学に架蔵されていることを知る者は、本学の学生や教職員の間にも少ない。また「顕微鏡についてのわが国最初の文献」(中野操氏)が本学に残されていることを知る者は、さらに少ないであろう。懷徳堂に関する周知・広報は、まず内部(学内および研究科内)に対するそれから為されねばならないのである。(なお近年、韓国・台湾・アメリカなど国外の研究者による懷徳堂文庫資料の利用が盛んとなりつつあることは付記しておきたい。)

さて、大阪府立中之島図書館には、今回紹介した資料以外にも、履軒の自筆本や短冊、帖など多数が架蔵されている。明治末に教次にわたり収蔵された資料群であるが、これらの中にはたとえば「懷徳堂」印記を有する中井柚園抄本『履軒弊帯』や、伝中井履軒自筆本『東遊紀行』など、注目すべき資料が多数含まれている。伝来状況の調査も含めた今後の研究の進展を期待したい。

(本センター非常勤事務補佐員)